# 技術・行政情報

## この人と1時間
## 中国の石炭開発計画を担う
## 張長松石炭工業省露天煤礦開発弁公室主任

エネルギーの7割を石炭に依存する中国は1986年から第7次経済開発5カ年計画でジュンガル炭開発など石炭開発に熱を入れていく．そこで今春新日鉄や伊藤忠商事などとの打ち合わせのため日中経済協会の招きで来日した中国石炭工業省露天煤礦開発弁公室主任兼石炭開発総公司副総経理の張長松氏にジュンガル計画や石炭開発事情について聞いてみた．張主任は「今世紀末までに国民経済を4倍増へ持っていくために石炭を倍増の12億トン（年間出炭ベース）に引き上げる必要があり，このため新炭田開発に努めたい」など，極めて率直に話してくれた．（聞き手　兼子次生）

―― 今回の来日目的は何でしょうか．

張　1年半ほど前から日本側とジュンガルプロジェクトについて話し合いをしている．その促進を図るため日中経済協会の招きに応じてやってきた．今，アメリカのベクテル社にフィジビリティスタディを依頼しているが，その中間報告に基づいて説明し，協力を促進しようという目的だ．

―― ところで中国のエネルギー事情はいかがですか．

張　わが国のエネルギーの約7割は石炭でまかなっている．今世紀末の西暦2000年には国民経済を4倍増にしようと考えているが，そのためにはエネルギー問題を解決しなければならない．そこで一番大事なのは石炭開発を行うこと，すなわち増量である．1980年の石炭生産は約6億tだから，2000年にはこれをどうしても12億tにしなければならない．

―― 中国の石炭はどのくらいの埋蔵量がありますか．

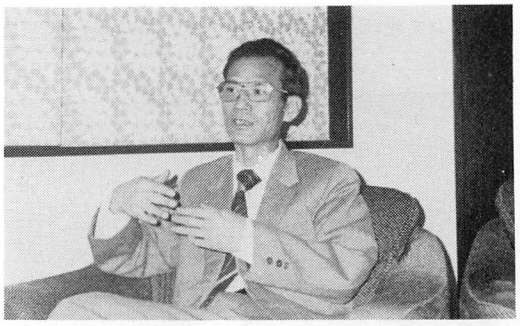
張　石炭資源自体は非常に豊富である．各省にすべて石炭があり，確認されている限りでも現在6,000億tだ．具体的な開発方法は，第1に既存炭坑の技術改良による増量を図ること．第2に新規開発．この中で一番狙っているのは露天堀りだ．露天堀りには5つの大きな計画があり，その1つにジュンガルプロジェクトがあるわけだ．

―― ジュンガル開発はどんなプロジェクトですか．

張　炭田は広いが，その中で第一期として考えているのは黒岱（こくたい）坑だ．ここは一枚厚さ24mの石炭層が全部で9枚あり炭質もよい．品質は7,400Kcalで灰分は洗浄後16%程度．年間出炭量は3,500万tだ．開発期間は第7次経済開発5カ年計画の中で，1986年にスタートして2年間の建設期間を経て生産を始める．

―― 資金的なメドは．

張　フィジビリティスタディが完了していないので概算額が出ていないが，ざっと総額20億ドルと予測できる．資金は中国政府の資金を使うし，外資も利用する．幸い，中曽根総理の訪中後に進展がみられ，日本の各業界，金融界から熱意のある協力をいただいている．事実，融資話は相当進んでいる．



―― ジュンガルから積出港の秦皇島まではどんな輸送法をとるんですか．

張　直線距離で860 km．炭坑からフフホトまでの150 kmを鉄道を敷設して，そこから1,000 kmのスラリー輸送という案が石炭工業省にあり，その他の輸送ルートも検討している．一方，鉄道案があり，調整しているところだ．技術者からみると，スラリーの方がコストが安く，運搬の確実性があるからスラリー輸送を推している．しかし，まだ結論は出ていない．

―― ジュンガル炭は日本へ輸出されるのですか．

張　日本の輸銀ローンは資源開発でないとダメなのが原則ですが，石炭需給がゆるんでいるから，胡耀邦総書記，中曽根総理の相互訪問を通じて，21世紀への友好増進を図るために特に引き取り義務はつけないことになった．しかし，必要があれば最優先にする．

―― 石炭開発面で日中協力はどんな形で進みますか．

張　4つの方法がある．第1はローンなどの資金面．第2は日本製の設備を優先的に買う．第3は技術管理，生産管理，開発にあたっての管理手法，つまりソフトを導入する．第4点は，炭坑長や技師長を招いて生産性を向上するために，中堅幹部，上層幹部，さらには一般の人材養成について協力願いたいと考えている．

―― ほかに，石炭を原料とする$C_1$化学工業の開発面ではどうですか．

張　むろん石炭を燃やすだけでなく，化学原料に位置づけてやっていく考え方だ．このため，三菱重工業や日揮などと技術協力して，石炭化学工業を育成していくことにしており，これから前進させるつもりだ．

（日刊工業新聞社記者　兼子次生）